



京都大学 防災研究所
Disaster Prevention Research Institute
Kyoto University

萌芽的共同研究
2022H-03

小学校での防災教育実践における主体性の構築を
めざした対話的評価手法の開発に関する研究
A Study on the Development of Interactive Evaluation
Methods for Developing Active Attitude in School
Disaster Education

令和5年5月
May, 2023

研究代表者
Principal Investigator

岡田夏美
Natsumi OKADA

研究及び教育への波及効果について

学校防災教育における、“主体的・対話的で深い学び”を実現するために、授業内のみならず、授業外での指導者と児童らとのコミュニケーションを捉えなおし、“授業アンケート”の形式を工夫することで、主体性と対話性の育成を補完することができた。主体的な行動への波及がめざされる学校防災教育に対して、より具体的で、実践的な研究として、成果を得ることができた。

研究報告

(1) 目的・趣旨

近年の学校教育での防災実践において重要視されているのが「主体的・対話的で深い学び」をどのような手法で達成するのか、という視点である。「主体的・対話的で深い学び」とは「学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けようとする事」である。この学びの過程で重要なことは、学びの内容が、学習者の関心に沿って展開されているかどうかという点でもある。つまり、子ども達が持つ関心の方向性や、授業の中で抱いた疑問などをどのように拾い上げるべきか、ということである。特に、既存の教科教育と比較して特殊な学習テーマである防災の学習が、単発的に授業展開される際に、その評価をどのようにおこなうべきかを検討する必要がある。

しかしながら評価手法の一つとして考えられる“授業アンケート”では、従来のトップダウンの知識伝達型の教育／学習をかえって規定してしまっている可能性がある。つまり、“授業アンケート”には「授業内容をきちんと理解したよね?」「このテーマに関して、当然興味関心があるよね?」という無言の圧力を生じさせ、指導者の意図に沿った回答が無意識に書かれているのではないかという懸念がある。このような評価手法でよい回答を得るには、当然その回答を得るための、知識伝達を主とした授業がプログラムされる。「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、教え方／学び方にのみ改善を求めるのではなく、その対となる評価手法にも「主体的・対話的で深い学び」を促すような方法を模索する必要がある。

(2) 研究経過の概要

本研究で研究対象とした2つの小学校では、これまで防災研究所と共同で、地震防災教育を展開してきた経緯がある。具体的には、下山小学校では2009年から、根雨小学校では2010年から、毎年継続されてきた。そのうえで、上述のような問題意識に対して、“授業アンケート”で生じるバイアスをできるだけ回避し、学習者（調査対象者）における「聞かれている感」をできるだけ少なくする形式として、本研究では、“従来の授業アンケート”と対比する“カード方式”を導入した。“カード方式”とは、メッセージカードに、まったく同じ質問に回答してもらう形式の授業アンケートである。

このようなアンケート手法の再検討を行いながら、①“従来の授業アンケート”と“カード方式”の回答の差異を評価すること、②主体的・対話的で深い学びの実現を評価することの2つの目的をもって、そのためのアクションリサーチを実施した。

(3) 研究成果の概要

① “従来の授業アンケート”と“カード方式”の回答の差異について

2つの形式が異なるアンケートに対する児童らの回答をそれぞれ比較した結果、大きく2つの解釈可能な軸を得た。一つ目の軸は、2つの形式のアンケートの回答の質的な内容の変化（図-1）、二つ目の軸は、カード方式で「自分」が主語になった質問が増加したことである。

図-1からは、授業アンケートで、「感想」や「科学知識」について書かれている内容多いことがわかる。一方カード方式では「感想」が著しく減少し、「科学知識」も授業アンケートよりも多い結果となった。この「感想」や「科学知識」は、いずれの回答形式であっても、記載内容に大きな変化はなく、数の増減のみで判断することができる。「過去の災害」と「自分の地域の将来の災害」は、カード方式のみで見られた。

このように、授業アンケートと比較して、カード方式の方で、分類項目がより多くなることがわかった。回答の形式が異なることによって、回答の質が異なり、またその回答の傾向は多様化するということが分かった。

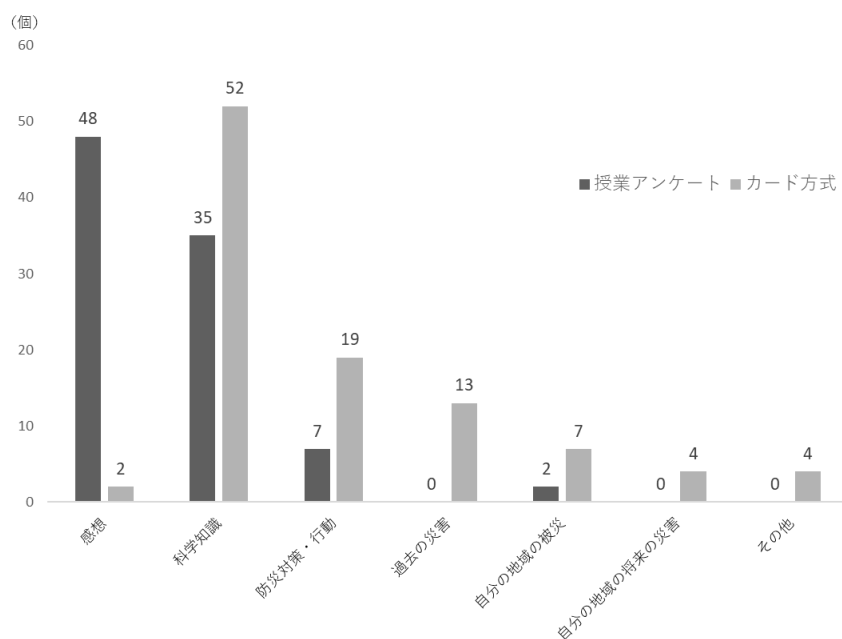


図-1 形式ごとの回答の質の差異

カード方式の方が、授業アンケートよりも、より多角的な視点から防災に関する質問が投げかけられるようになったことに加え、カード方式では、「私はどうしたらよいですか」といった主旨の、防災に対する自発的な行動を考えるような質問が増加していたことも特徴的である。“自分”がどうしたらいいか?“私”はどうすべきか?というような、自分がその行動の主体としての視点の回答が、カード方式で増加していた。これは、カード方式の方が、授業内容を振り返る際に、より主体性を持って捉え、考えたことを回答しやすかった、という側面を示唆していると考えられる。

②主体的・対話的で深い学びの実現を評価するために

このような授業外で実施されるアンケート結果から、“カード方式”では、いろいろなことを聞いてみたい、という知的好奇心を誘発し、気軽に質問を行える環境を構築できたことがわかった。アンケートへの回答という、外化された児童らの文章が、その児童にとって主体性を持った内容であるかについては、担任教諭とのより密な連携が重要ではあるが、本研究においては、その児童の主体性が、“カード方式”に、部分的にでも見られたと評価している。

③まとめ

なお、カード方式で子どもたちから得られた質問のいくつかは、個別的な回答で終わるのではなく、その質問を次回の授業時の座学でも取り上げて、一人の関心をクラス全体にも広げるフォローアップも行い、アンケートをもとにした授業内容の改善もめざしている。

本研究では、防災教育における「主体的・対話的で深い学び」のために、授業外のフォローアップイベント（＝授業アンケート）のデザインを工夫することで、個別的な部分で「主体性」の育成にアプローチできる示唆を得た。

学校教育においては「主体的・対話的で深い学び」に対する関心は継続して高まっており、さまざまな工夫や議論が展開されている。本研究で提起したカード方式については、今後も継続して実施し、その効果と課題についてより明瞭に検討し、同じ効果を示すアンケート形式についても検討を行い、主体性をはぐくむ学校防災教育のあり方を模索していく。

(4) 研究成果の公表

<学会等での発表>

・岡田夏美・矢守克也(2022), 小学校での防災教育実践における主体性の構築をめざした対話的評価手法の開発に関する研究, 令和4年度京都大学防災研究所研究発表講演会 於京都大学防災研究所

・岡田夏美(2022), 防災教育における「主体性・対話性」を評価するための対話的評価手法に関する研究, 令和4年度第17回防災計画研究発表会 於京都大学防災研究所

<学術論文での発表>

・岡田夏美・矢守克也(2023年5月末現在、審査中)「学校防災教育における対話的評価手法の開発に関する研究—「主体的・対話的で深い学び」をめざして—」